

## 〈原著論文〉

大正末期昭和初期におけるソコール運動の日本の体育に及ぼした影響  
— 体育スポーツ関係者のソコール運動の捉え方（視点）について —

川端昭夫\* 來田享子\*\* 木村吉次\*\*\*

Influence of the Sokol Movement on Japanese Physical Education  
from the Late Taisho and Early Showa Eras:  
Viewpoints of Physical Education and Sports Personnel on the Sokol Movement

Akio KAWABATA \*, Kyoko RAITA \*\*, Kichiji KIMURA \*\*\*

## Abstract

This study investigates the process of how the Sokol movement (Sokol) was introduced into and accepted by Japan from the late Taisho to the early Showa eras. The purpose of this study is to discuss viewpoints about Sokol by physical education and sports personnel in each of the periods and explore its impact on physical education in Japan. The results are as set forth below.

## 1) Introduction and acceptance of Sokol in Japan

Sokol was introduced to Japan from 1922 to 1940 (especially from 1927 to 1935).

## 2) Viewpoints on Sokol from Period I through Period IV

To discuss the viewpoints, the years from 1922 to 1940 were divided into four periods of approximately by five years.

In Period I (1922-1926) or the referral period of Sokol, Sokol was referred to in the context of national spirit, patriotic movement, Sokol fest, mass gymnastics, national physical education, organizational activities by the Ministry of Railway, the Ministry of Education (physical education and social education bureau), the Ministry of Interior, the Army gymnastics school and the Navy. In Period II (1926-1930) or the knowledge dissemination period about sokol, a various literature on Sokol was published by the Ministry of Education, the Army gymnastics school, the Czech Embassy and the viewpoints are seen in terms of the national spirit, patriotic movement, physical education democracy, and Sokol activities. In Period III (1931-1935) or the period of spread and understanding of Sokol movement, educators, the Ministry of Posts and Telecommunications (former Ministry of Communications) and the media addressed the national movement, world Sokol fests, and Sokol ideas. The media reported on Sokol fests and mass gymnastics in detail, which promoted understanding of Sokol in Japan. In Period IV (1936-1940) or the period of declining interest in Sokol, Sokol is referred to mainly by physical education personnel as well as by the Institute of Social Education, Youth Sports Associations, the Ministry of Foreign Affairs, and the

---

\* 中京大学スポーツ科学部、\*\* 中京大学体育学研究科、\*\*\* 中京大学スポーツミュージアム館長

Ministry of Health and Welfare. However the volume of literature was comparatively small.

### 3) Viewpoints of Sokol by physical education and sports personnel and the impact on physical education in Japan.

The focal points concerning Sokol from the late Taisho to the early Showa eras were: (1) the national movement; (2) Sokol fests and mass gymnastics; (3) organization and management, Sokol ideas and activities; (4) promotion of national physical education; and (5) the youth movement.

Sokol was understood as a nationalistic movement model, which was expected to promote irredentism and patriotism, and at the same time served as a nationalist device model. During the interwar period before World War II, Sokol served as a role model for physical education personnel to promote national physical education and social physical education (gymnastics).

## 1. 研究目的

ソコールは、「スラブ民族の解放と独立を最終目的とし、体育活動を中心とした多様な国民教育活動であり、同志の集団による国民教育活動である」<sup>1)</sup>、また、「チェコスロバキアの国民大衆的体育運動、芸術運動」<sup>2)</sup>とされている。第一次大戦後チェコスロバキアの成立から現代に到るまでソコールの世界的な活動、理念、組織運営、多彩な教育事業(体育を含む)は体育関係者に注目された。また、その主要行事としてプラハで開催されるソコール祭は、世界最大の民族祭典であり、そこで展開された大規模な集団体操は、戦前から現代まで日本の多くの体育スポーツ体操関係者に注目されてきた<sup>3)4)5)</sup>。当時多くの体育関係者は、ソコール祭に体育の普及と国民体育の発展の理想型を見だし、憧れを抱き、日本でも類似の体操大会、体操会などの実現を考えていた。昭和10年(1935)以降には集団体操が盛行し、戦争進行と並行して国民意識を高揚させ、さらには全体主義的統制を進めて行く役割を果たした。

昭和55年(1980)以降のソコール研究についての代表的論説としては、ティルシュとソコールの思想(体育思想)を考察した功刀<sup>6)</sup>、ポーランドソコール体操協会の成立から国内外への伝播やソコール体操の内容を扱った清和<sup>7)</sup>、チェコの体操運動を通じたソコールと国民性、体操運動とネーション、ソコールに関わるチェコ系とドイツ系民族の対立などを扱った

福田<sup>8)9)10)</sup>、帝政ロシアにおけるソコールの普及と伝播を扱った大平<sup>11)</sup>、チェコとネーションの関わりを扱ったノルテ(Nolte)<sup>12)</sup>などの研究がみられる。但し、これらの殆どはチェコ国内国外のソコールを扱ったものであり、日本の大正末期昭和初期におけるソコールと日本の体育スポーツの関わりを扱った研究はごく僅かで、日本の近代体育史研究にとって重要な欠落部分となっている。

そこで本研究では、大正末期昭和初期に発表されたチェコのソコールに関する著書・論説を対象に、ソコールの紹介と受容の過程を検討し、各時期における日本の体育スポーツ関係者のソコールの捉え方(視点)を明らかにした上で、それらが日本の体育スポーツに及ぼした影響について考察することを目的とする。

## 2. 研究資料と検討課題

### 1) 研究資料の収集

大正末期昭和初期に日本で発表されたソコールに関する著書及び論文、論説を調査した。対象年代に発刊された体育・スポーツ雑誌である全日本体操連盟編『体操』、大日本体育学会編『体育と競技』、日本体育会編『国民体育』、朝日新聞社編『アサヒスポーツ』、大日本体育会編『アスレチックス』におけるソコールの関連資料を収集した。また、同時期の朝日新聞、毎日新聞、読売新聞に掲載されたソコールの関連記事を収集した。

## 2) 研究課題

はじめに、大正末期から昭和初期における日本へのソコールの紹介と受容について検討する。第二に、本研究において文献に見いだされた大正11年(1922)～昭和15年(1940)までを4期に分け、各期における体育スポーツ関係者等のソコールの捉え方(視点)を取り上げ、その注目した内容を検討する。第三に、大正末期昭和初期における体育スポーツ関係者のソコールの捉え方(視点)と日本への影響について考察をする。

## 3. 結果と考察

### 1) 大正末期昭和初期における日本へのソコールの紹介と受容

本研究で使用されたソコール関係の文献は、表1に示すとおりである。これらソコール関連の文献数は、大正11年(1922)から大正15年(1926)まではごく少数であり、その後昭和2年(1927)から増え、昭和5年(1930)から昭和8年(1933)まで多く紹介される。その後、昭和9年(1934)、昭和10年(1935)と減少し、昭和11年(1936)から昭和15年(1940)

まで少数例となる。文献数の傾向から、ソコールは、大正11年(1936)から昭和15年(1940)までに日本に紹介され、特に昭和5年(1930)前後の期間に集中していることが明らかになった。

### 2) 大正末期昭和初期(大正11年(1922)から大正15年(1926))における各時期にみられるソコールの捉え方

ここでは、本研究で対象とする大正11年(1922)から昭和15年(1930)を5年ごとに4期に分け、各期の著書・論文の内容を検討することを通して、ソコールの捉え方と変化を検討する。

#### ① 第I期(大正11年1922から大正15年1926)「日本へのソコールの紹介期」

この年代の論説は僅かに8件である。大正12年(1923)11月には、国民精神作興に関する詔書の発令による思想統制が始められるが、その前年の大正11年(1922)鶴見は、「ソコール運動の背後には愛国的精神の横溢するものであった」と背景の愛国的精神に着目している<sup>13)</sup>。愛国心の涵養は、精神作興の国民への期待であった。国民精神作興に関する詔書が公布

表1 大正末期昭和初期におけるソコール運動を扱った文献一覧

	年代	著書件数	文献執筆者
大正11年	1922	1	鶴見祐輔
大正12年	1923	2	下田次郎、井上賢一
大正13年	1924	2	井手敏雄、大谷武一
大正14年	1925	2	大井浩、氏原佐蔵
大正15年	1926	1	合田亀太郎
昭和2年	1927	4	岡部平太、大谷武一、嘉納治五郎、水野廉太郎
昭和3年	1928	2	サラトナイ、今村嘉雄
昭和4年	1929	3	東口真平、大野靖七、小笠原長生
昭和5年	1930	8	佐々木等、文部省社会教育局、真行寺朗生、大谷武一、大麻唯男、村山正明、合田亀太郎(2)
昭和6年	1931	4	国際パンフレット通信社、大谷武一、白尾千城、菅原亀五郎
昭和7年	1932	6	小原国芳、森秀、高木翠岱、岩野次郎、村田忠一、加藤普佐次郎
昭和8年	1933	6	吉田清、村山正明、吉田清、二荒芳徳、甲佐知定(2)
昭和9年	1934	3	広井家太、宮下二郎、松岡
昭和10年	1935	0	—
昭和11年	1936	3	大石峰雄、社会教育研究所、大島三郎
昭和12年	1937	2	植田三四郎、森脇正夫
昭和13年	1938	1	吉田健吉
昭和14年	1939	3	本間茂雄(2)、中島海
昭和15年	1940	1	児玉政介

され大正12年(1923)には思想統制などが始められる。下田は、ソコールを体操会の大規模性、国民的団結の強化およびドイツ人に対する示威と指摘している<sup>14)</sup>。大正12年(1923)井上は、『欧米学校印象記』において、「ソコールはチェクの一物でこの国特有の国民的体操である。宛も日本の青年団処女会の如き或いは薩藩の健児の社の如きものが全国に散在し、その団員たるものは平素本部に集合して体操の練習をなし、同時に国民的志気を鼓舞するものである。・・・」<sup>15)</sup>とソコール祭と固有の国民体操などについて報告している。詔書発布後の大正13年(1924)には、海軍(医学博士)の井出は、大正9年(1920)プラハ開催のソコール祭視察経験から、チェコの国民祭と位置づけ、チェコ人に対する大会の意義を述べ、また、日本との関連から「我国でも紀元節や天長節等色々の国民祭の外にこんな国民全部が国民の心を唱い、国民の身を誇ると云ふような祭りがあったら、単に国民の健康を向上するばかりでなく、精神上にもどの位利益があるかと思う」<sup>16)</sup>とソコールに類似した日本の国民祭の実現と、国民の健康と精神的な向上の衛生的な利益を説いている。大正13年(1924)大谷<sup>17)</sup>は、ソコールは、プラハで開かれる大体操競技大会であり、ドイツからの独立を目指す政治的な意味を持つ点に着目している。大正14年(1925)氏原(内務技師)は、「国民保健の増進と運動競技奨励の必要」(内務省篇『運動競技全書』)において、チェコのソコールを取り上げ、「欧州大戦の後を受け民族自決の一結果としてチェクとなり、最初の運動祭ソコール・フェストは建国祭をも兼ねたが如く、一九二〇年六月に於いて開かれ全国より約十万の代表的男女が馳せ参じて、最も盛大に挙行された。同国では、之を以て組織的な感情を高調せしむると共に、国民健康の向上を図らんことを期している。若し順序どおりであれば1924年はソコール・フェストの開かれる年に相当している」と述べ、友人の井出敏男氏の国内の報告を取り上げて、ソコール祭の状況を報告している<sup>18)</sup>。

大正14年(1925)陸軍戸山学校の大井は、

大正10年(1921)から大正13年(1924)スエーデン、フランスの留学経験をもとに、チェコの体育奨励と仏国在住時のチェコ人のソコール活動を報告している<sup>19)</sup>。I期においては、内務省と文部省の体育スポーツ政策が顕著になる。内務省は、明治神宮体育大会の開催を始めた大正13年(1924)青年団を対象に体育・スポーツ政策を顕在化させた年であった<sup>20)21)</sup>。

大正14年(1925)には内務省編の運動競技全書を刊行している。また、第2回神宮大会からマスケムが取り上げられ、後年種目としてマスケムが大会に位置づけられる。このマスケム創設には、大井が直接関係し、海外の体操の視察経験、またソコールの集団体操の情報、体験報告が大きく影響している<sup>21)</sup>。大正15年(1926)文部省社会教育局の合田は、「ソコール協会は、体操、律動的運動、各種競技、音楽、日常栄養について訓練された男女成人青年児童を対象としたクラブで、高尚な人格、社会的理想を意図する」と述べ、ソコールのねらい思想なども指摘している<sup>22)</sup>。I期においては、合田の示すようにソコールの組織、活動の詳細やねらい思想に着目した論説は稀であり注目される。この期は、内務省、文部省、陸軍、海軍、運輸省などの政府関連機関の人物によりソコールが紹介されたソコールの「紹介期」と位置づけることができる。

## ②第II期(昭和2年1927から昭和5年1930) 「ソコールについての知識普及期」

この時期は、各年で2件以上の文献がみられ、特に昭和5年(1930)は8件と最多である。まず、ソコールを「愛国精神運動」とした岡部、また「愛国運動」とした小笠原など「国家的なムーブメント」としての捉え方が見られる。昭和2年(1927)に岡部は、大連から嘉納治五郎に宛てた書簡の中で、ソコールはチェコの愛国精神運動と位置づけ、「ソコール運動は、一つの精神運動が体育を誘致し、その体育が更に精神運動を Refrat して、大衆に及んで行く点が先生の方法に似て居ると思います」と述べ、嘉納の体育方法との類似点を指摘している<sup>23)</sup>。同年大谷は、論説「ソコール運動」の中

で、ソコール体操から集団体操を想起させるが、「近年一種の国民訓練の必要性が高まり、国民運動への注目からソコールが問題にされる」と指摘する。また、チェコの体育は非常に発展し、「今では国民教育の一要素となり、国民的習性となりつつある」とチェコの体育振興と国民教育に注目している<sup>24)</sup>。昭和2年(1927)嘉納は、ソコールをチェコの国民体育として位置づけられるが、会員数からしても普及水準が乏しいと述べ、日本の攻防式体育や表現式国民体育も有効性をあげながら国民体育の方法として提言している。当時のソコールの捉え方としては珍しく批判的な立場を取っている<sup>25)</sup>。昭和2年(1927)水野は、「ソコル団」は、「青年男女の運動競技を目的とし、同時に心身の鍛練、人格の養成、愛国心の鼓舞、公共心の涵養等に関する国民訓練機関」と述べ、その創設と趣旨について、団長ジョセフ・シャイナー博士の宣言文を用いて、「ソコル団は、独立国の国民たるに適せることに成功した。斯くしてデモクラティックの国民気質を培養し、各階級の共同一致の精神を鼓舞した」とデモクラティックな国民気質に注目している。また、ソコールと日本の青年団とを関連づけて、「幸いに我国には、明治大帝を奉祀する明治神宮境内にその本部を有する青年館がある。これを中心にして全国の青年団が打って一団となり、将来一段の修養を積むに於いては、ソコル団に優して世界の視聴を傾くるの一大青年団体たるを得ん。全国の青年よ。世界の大势に目覚めて国家の為に奮起せよ。」と述べている<sup>26)</sup>。昭和3年(1928)にサラトナイ(チェコ大使)は、ソコールを「チェコスロバキア全国国民の健康増進、剛健なる国民精神振興に、国民訓練と体育とを兼ね、平時にあっては、組織的に国民の体育を奨励し、国家有事の日に備ふる」と、国民の健康増進、国民精神振興、国民体育の奨励、有事への備えと述べ、また、「スポーツが体育専制をめざすに反し、ソコール体操を体育デモクラシーの表示である」とソコール体操の体育デモクラシー的特性を指摘する<sup>27)</sup>。この時期の国民体育や社会体育の概念形成に大いに寄与しているものであ

る。同年今村は、ソコールを「民族精神の振興と肉体的鍛錬を目的とした団体運動であり、愛国的、道徳的、儀禮的な訓練である」とし、「都ブラグの大競技場に、毎年一回のソコール祭を期して全国のソコールが雲集するのである」と国民運動として紹介した<sup>28)</sup>。

昭和4年(1929)小笠原・猪狩は、ソコールは、主導者ティルスやフューゲネル等指導者のもとに国民体育の振興をねらいとする愛国運動として設立、独立に寄与したと述べている。また、日本人の特性を鑑み、「総じて新興の欧州諸国には、大概此の如き愛国運動があるのだ。」<sup>29)</sup>と述べ日本の愛国心の必要性を指摘する。また、昭和5年(1930)文部省社会教育局は、『欧米青少年運動の精神と実際』を編纂しており、ソコールは「愛国的体育団体であり、主に体育振興である。・・・国民訓練と体育とを兼ね、併せて愛国的精神の修養を目的とし、単なる保健運動ではない。・・・チェコスロバキヤの体育の特色は、其の普及せることと、デモクラティックな精神と、自助の精神である」とサラトナイと同様デモクラティックな精神を指摘している。また、本書では、ソコールは、「幾多の体育協会の組織・管理方法、最大の会員を持ち、社会のあらゆる階級の人を集めている」と、広くソコールの組織・会員と階級などにも触れている<sup>30)</sup>。Ⅱ期における特徴的な捉え方としては、大正デモクラシーの影響<sup>31)</sup>もあり、サラトナイ、水野、文部省社会教育局のように、ソコールをデモクラシーとの関係で理解する捉え方が見られる。

大阪朝日新聞の東口真平は、昭和3年(1928)欧州視察時のソコール参観体験から、ソコール体操や実施者の真剣な態度への感銘を述べ、「わが国におきまして何等かの形式方法によりましてかかる組織がうちたてられることは国民体育向上のために真に望ましいことと存じます。」<sup>32)</sup>と日本における類似の組織の設立を望んでいる。東口は、大阪朝日新聞社スポーツ部長として、中等野球などのスポーツ行事を手掛け、昭和10年(1935)朝日新聞社主催の集団体操の祭典である大楠公600年祭記念体操大会

を企画し運営にもあつた人物であり、その動機にはソコールの視察が強く影響している。また、昭和3年(1928)には逓信省がラジオ体操を創設し、国民への普及を図るが、翌年4年(1929)に大野(北海道大学教授医師)は、ラジオ体操講演録の中で、ソコール団の盛んな活動を述べ、欧米人と比較し日本人の体格水準の劣ることを指摘し、「国民が自覚して体格の向上を図り健全なる日本民族を作り吾々民族の隆盛を図るといふような必要を痛切に感ずる」と述べ、「我国の国民保健体操は最も容易に誰でも出来る」と奨励している<sup>33)</sup>。東口は、ソコールのような国民体育の類似の組織の設立を提唱し、大野は、ソコール活動と日本人の体格と民族の健全性、民族の隆盛など意図して国民保健体操の適性と関係づけて提言している。

昭和5年(1930)には、ソコールの集団体操、体操事業に関わる論説が注目される。真行寺は、「愛国の動機から出発して創けられた<sup>(マ)</sup>チェクのソコール祭に於ける集団体操こそは真に偉観又壯観である」と、日本にみられないソコール大会のスケールの大きさ、荘厳さに注目している<sup>34)</sup>。同年大谷は、ドイツのヤーンやスエーデンのリングなどの功績をあげ、「体操の歴史は、愛国運動の歴史であり、興国運動の発展でもある」とし、「民族主義、国家主義を基礎とせる体操運動の如きは、今は大いに盛んにしなければならぬと思う」<sup>35)</sup>と民族主義、国家主義を基礎とする体操運動促進の必要性を主張している。同年大麻は、チェコではソコール体操団を組織し、チェコ精神に基づく体操を奨励、国民の教養に務め、独立を勝ち得たとし、「体育立国」とも讃えられると述べている<sup>36)</sup>。また、村山は、ソコールは世界的に有名な組織、体操事業であつて、チェコ体育の新傾向の原点であると述べる<sup>37)</sup>。同年合田によるソコール運動のねらい・思想、組織クラブに着目した論説が注目される。合田は、論説「ソコールの父ティルシュ」の中で、ソコール運動を国民的愛国運動と位置づけ、主要な指導者ティルシュとフューゲネルを取りあげている。特に、合田は、ティルシュが、ショーペンハウエルやダー

ウインの理論に傾倒し、国民教育の思想を構築した経緯を述べながら、ティルシュの国民の目指す理想として、「心身共に多方面の発達と、調和した発達とを遂げた完全な個人が、彼の求め、而して発見したものであり、美しくして善良なる個人がティルシュの教育しよう并希望した新青年の理想であつた」と指摘し、ソコールの愛国運動と中核指導者ティルシュの思想を詳細に取り上げている<sup>38)</sup>。また、合田は、全世界に誇る愛国運動として、ソコール協会の運動をあげ、組織力、整然とし徹底した訓練に注目しながら、類をみない立派な運動としている。合田は、「ソコール協会の目的は、国民全体の健康増進、健全な精神の養成し国家興隆に資する、その手段として体操を課し、その間に紀律、節制、尚武、愛国の精神を養成するもの」としている。また、ソコール活動で行う体育は、徒手体操、機械体操<sup>(マ)</sup>、武器を持つ体操、及びスポーツの中の有益なるもの即ち乗馬、水泳、漕艇、水滑、山野の跋涉など幅広いスポーツの活用を紹介している。また、競技スポーツは精神教育上不利益として却って排斥していることは特に注目すべき点であると述べている<sup>39)</sup>。また、合田は、ソコールの愛国運動としての性格に注目しながらソコールのねらい、思想の詳細を紹介し、また、体育活動である体操、有効なスポーツについて取り上げている。当時詳細にソコールの内容を取り上げ、社会教育、社会体育による立場でソコールを論じた貴重な論説である。Ⅱ期においてはソコールを扱う文献数が多くなり、ソコールの紹介も、国民精神(愛国心)、国民体育の振興、体育デモクラシー、ソコールの組織と活動、ソコールのねらいや思想・体操事業や集団体操などの視点も広がりⅠ期よりソコールの理解が深まっている。しかし、基本的にはナショナリズムとの関わりで捉えられる基調になっている。

### ③第Ⅲ期(昭和6年1931から昭和10年1935) 「ソコール運動の理解浸透期」

昭和6年(1931)に出された3つの論説のうち、国際パンフレット通信『愛国大運動ソコール』では、ソコール運動の目標は「独立と民族

の解放、軍事主義の示威」<sup>40)</sup>と書かれ、大谷は、「チェコの独立は、ソコール団員の献身的な活躍している」点に注目し<sup>41)</sup>、白尾は、ソコールを「チェコ共和国宣言の国民的な生命の源泉」とし、ティルシュによる新チェコスロバキア民族の構想、ソコール体育協会や世界的な組織力などにも言及している<sup>42)</sup>。Ⅲ期では、これら論説のソコール大会の報告と合わせて、朝日新聞、読売新聞において頻繁に取り上げられたことも特徴である。昭和6年(1931)には、東京朝日新聞「連合青年団をチェコに招待 名物ソコール祭へ」<sup>43)</sup>(写真1)、大阪朝日新聞「明日から体操週間 旺盛な祖国愛を 明治節の体操祭」<sup>44)</sup>などが掲載される。また、日本体操大会の関連から東京朝日新聞「五月空の下・日本体操大会迫る」において、ソコールが取り上げられた<sup>45)</sup>。昭和7年(1932)には、読売新聞「ソコール第9回を六月プラグで」<sup>46)</sup>、大阪朝日新聞「ソコール運動の始祖 生誕百年記念大会 今夏プラグで華々しく挙行 二十二カ国会

動やソコール大会(祭)について詳細に紹介される。小原は、当時希少であったソコールの写真集である玉川教育研究所編集「体操アルバム」の巻頭において、(一)ソコールの精神「個人は無で、民族が一切」、(二)運動種目が自然で、多方面、(三)美的芸術的訓練、健全



教員体操大会  
大阪朝日新聞  
1932年5月30日

六千の先生が  
練りあげる体力  
この盛況をフィルムに撮り  
チェコのソコール体操会へ  
大阪朝日新聞  
1932年5月30日

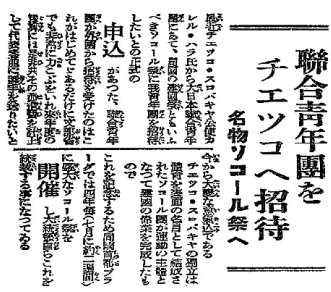


写真1 東京朝日新聞。連合青年団をチェコへ招待 名物ソコール祭へ、『朝日新聞』、1931年7月30日

写真2 大阪朝日新聞。六千の先生が練りあげる体力 この盛況をフィルムに撮りチェコのソコール体操会へ 大阪朝日新聞、1932年5月30日

場に招待」<sup>47)</sup>、同「ソコール祭(上)息づまるような操練美 7月2日から四日間」他<sup>48)</sup>、同「六千人の先生が練り上げる体力 この盛況をフィルムに撮りチェコのソコール体操会へ 大阪朝日新聞」<sup>49)</sup>など、ソコール祭の開催年に合わせて報道されており、ソコールの関心度が高まる契機になっている(写真2)。特に、大阪朝日が4回に渡り取り上げていることが注目された。Ⅲ期の昭和7年(1932)では、多数の書籍、論説でソコール運

な国民精神愛国精神を啓蒙、(四)会員の相互扶助と社会的協力などソコールへの共感点について述べている<sup>50)</sup>。同年森秀は、第7回ソコール祭を、高木と岩野は第8回大会をいずれも肯定的に取り上げ詳細を紹介している。森は、第8回大会を「真に調和美」とし、「チェコの民族の力強き姿」であり、「体育を通じた民族運動」であると指摘した。また、全日本体操連盟の使命として、「勿論・・・ソコール団の組織をそのまま真似ることはできないが、各地に体操クラブや組合などの実行団体ができて、健康運動に対して大いに氣勢をあげたいものだと念ずる次第である」と日本でもソコールと類似の組織の実現を願望している<sup>51)</sup>。高木は、「偉大

なる哉第9回ソコール祭」の中で、チェコ人の特性、身体鍛錬、国民的健康などソコールの特色を述べている<sup>52)</sup>。岩野は、「第九回ソコール体育祭を観るの記 プラークにて」と題する論説の中で、ソコールの起こりと主旨について述べ、チェコの愛國の士ティルシュにより設立された体育団体であり、その精神主旨は、「体育に名をかりて国民精神を覚醒し自由、平等、同胞精神に依りチェコ・スロバキ全体を統一するにあつた」と指摘している。また、ソコール祭のパレードの視察から「マサリック大統領及びプラーク市に敬意を表する為とあつたが、とにかく国民統一運動だ」と述べ、また、ソコール祭の集団体操について、「女子のマスゲームは非常に面白く専門家の参考となる様にも思われた。それは実によく音楽のリズムに体操を合したこと、連続結合体操が実に無理なく出来たことだった」とマスゲームが日本の専門家への参考例となる点を指摘している<sup>53)</sup>。当時集団体操(マスゲーム)は、明治神宮競技大会で第2回大会に初めて採用され、以降種目として位置づけられ大会の不可欠の催事になり集団体操として発展したことが注目される。昭和7年(1932)には当時の一般人の体操認識は、「大会のデモンストレーション」の集団体操だけであったが、川本信正は、「神宮大会といえはほかの競技は別にしてもこのマスゲームが楽しみだという格別な“ファン”を生み出すほど特別な地位を占める」と述べている<sup>21)</sup>。また、昭和10年(1935)大阪朝日新聞社主催の大楠公六百年記念祭体操大会(第2回以降日本体操大会)が創始されるが、集団体操の全国的な大会として、多数の観客を集め、昭和18年(1943)第9回大会まで「見せる集団体操の祭典」の流れを作り上げた<sup>54)</sup>。類似した体操大会の開催実現や集団体操の展開に影響したものとして、チェコのソコールが強く関連したものと考えられる。

昭和7年(1932)村田は、ソコールの創設の精神は、「国民的、民族的、宗教的であり、国民スポーツは世界的な驚異」と述べる<sup>55)</sup>。同年加藤は、「ソコール体操は、武装し得ざる国民の超武装的訓練であり民族的団結の表れであ

り、その背景としてのソコール精神を見落としてはならない」と提言している<sup>56)</sup>。高木、村田、加藤らは、ソコール大会と関連して、民族の団結と独立、国民統合の運動、ソコールの精神にも注目したものである。昭和8年(1933)村山(体育柔道家)は、ティルシュの指導者としての活動を述べ、氏の考案した体操は、「軍事的色彩はあつたが高尚な体育理念を含む」と理念の高尚さを捉えている。同年二荒は、「十九世紀の後半のスラブ民族の文化的発展史に於いて、ソコール団体の運動は、最も顕著にして且つ甚だ興味のある問題である」と述べ、フューグナーの活動やティルシュの思想を取り上げながら、「体操の指導は只筋肉の発達と云ふに留まらず、必ずや民族の理想に基づき、深い哲学的根拠によって精神的結合の目的に用いられなければならないと云う事である。」とし、体操指導は民族の理想、哲学的根拠による精神的結合を意図して活用する必要性を述べている<sup>57)</sup>。

昭和8年(1933)発行の論説の中では、昭和7年(1934)同様、体育関係者の吉田、甲佐、村山は第9回ソコール祭を取り上げている。吉田は、9回ソコール大会は「第11回オリンピック大会と共に世界二大運動大会として国際的人気を集めた」と評価し、また「組織的な国民大衆運動が集団体操により強く印象づけられる」と国民運動としても位置づけている<sup>58)</sup>。甲佐(大阪府体育主事)は、アサヒグラフ誌「チェコのソコールフェスティバル(1)～(3)」<sup>59)</sup>の中で、連載でソコール祭開催状況とソコール体操の実施内容の詳細を報告している。また、先に述べた村山は、第9回ソコール祭について、英国の新聞セントラル・ユーロピアン・オブザーバーの記事を引用して、「素敵な壮観の組織の広大な精神並びに完全さの観念を観る」<sup>60)</sup>と大会の大きさや完成度を指摘している。昭和6年(1931)から昭和8年(1933)におけるソコール祭への関心の高さが理解できる。昭和9年(1934)に、広井、宮下、松岡により立場の異なる論説が書かれている。広井は、ソコールは世界的な組織であり、ファイネル、ティルシュ、マサリック、シャーナーなど4名



の指導者の努力で発展した事、また、ティルシュの体操システムとして「軍隊的であるが体育理想を有する（美と調和の教育）」とソコールの体育理念に着目している<sup>61)</sup>。宮下は、『国民の力と健康を増進することによって、国家観念を養え』と云うティルシュの言葉を標語とし、「ソコール運動は、国民訓練と体育とを兼ね、併せて愛国的精神修養を目的とするもので、単なる保健運動ではない」<sup>62)</sup>としている。また、独逸、伊太利などの例と共にチェコのソコールの青年教育との関係を、「青年教育は、体育の直接的な目的であるところの、青年をして身体的に作業を可能ならしめることを求めると共に、身体練習その他あらゆる教化的手段によって、青年に道徳的教養を与え、特に民族、国家に対する理想的な徳目であるところの社会的感情、即ち共同精神を内から喚起し、ひいては神を畏敬し、祖国及び郷土を愛し、かかる愛は必然的に祖国及び郷土への犠牲的精神、誠実、帰依を起こし、新清にして悦びに満ちた感情を青年に持たせるようとするところである」とし、青年体育と青年教育の根本精神をソコールの標語で結んでいる。簡易保険局企画課の松岡は、「チェコのソコール国民体操が民衆運動として偉大な成功を収めた」とする局長田辺隆二氏の意見を参考に、「チェコスロバキアのソコール国民体操が民衆運動として異常なる成功を収めたことに興味を持ち、我国でも国民的体育運動を通して精神作興に資するを得ば、時弊を国救する上に於いて極めて有意義なることを痛感されていたことも、本施設が比較的容易に実現した原因であつたことは特筆せねばならない。・・・」と国民体操の策定にあたり、ソコールからも影響を受けたことを明らかにしている<sup>63)</sup>。Ⅲ期においては、多数の文献や全国紙においてソコールが頻繁に取り上げられ、捉え方も、民族独立、ソコールのねらいや思想、第8回・第9回ソコール祭、指導者の思想と体育システム、青年運動、国民保健体操などと広く詳細な記述が見られるようになる。ソコール祭が、集団体操ばかりでなく、実際の国民体育、国民体操の普及の運動にも影響した点も注目さ

れる。また、昭和6年・7年の全国新聞では、ソコール祭の開催にあわせて、大会予告や報告などが頻繁になされた。この時期では、昭和6年（1931）満州事変、昭和7年（1932）五一五事件、昭和8年（1933）国際連盟脱退など日中戦争へと突き進む状況ではあったが、ソコールが体育スポーツ関係者、政治家、メディア関係者など広い分野の人材に取り上げられ、日本にも類似の組織の存在を希望する動向が生まれていた時期、すなわち、「ソコール運動の理解浸透期」と言うことができよう。

④ 第Ⅳ期（昭和11年1936から昭和15年1940）「ソコールへの関心衰退期」

Ⅳ期の昭和11年（1936）には公表された三つの論説が見られる。大石は、論説<sup>64)</sup>の中で、愛国精神修養を目的とする国民訓練の体育とし、「保健運動が多く、種々の教育的事業を結び付けたものであり、ソコール祭の集団体操は、厳格である」ことを指摘し、また、体育運動と兼ねる点で、「国家主義的教育的体育」として大きな示唆を与えると述べた。同年社会教育研究所による論説「世界大戦の影響と青年教育運動」<sup>65)</sup>では、ソコールはチェコの青少年運動であり、「欧州視察の有識者を痛く感激せしめた」と指摘している。また同年大島（帝国少年団協会主事）は、「民衆の教育運動であり、修養自治機関」であり、日本の青少年運動と酷似した点を述べながらも、「我国では、体育スポーツ、運動と体操等の認識に多くの混乱があり、体育を通じての国民性発揮或いは国民的な独自の運動法などは十分検討される必要がある」と国民体育と独自の運動方法を指摘する<sup>66)</sup>。社会教育研究所と大島は、政府の奨励している青少年運動に関わる視点を提示している。

昭和11年（1936）には、東京朝日新聞「五月空の下・日本体操大会迫る」<sup>67)</sup>の中で、ソコールが取り上げられた。岩原拓（文部省体育課長）は標題「民族総合への力 合同体操の真意義」の中で「ボヘミア民族がソコール体操によりその民族意識を鍛え上げたときは有名な話である」と注目し、また、文部大臣平生夙三

郎は、「チェコスロバキアに興ったソコール祭など国家的信念に生きる国民は、自身の手によって強力な国家を建設しつつあり、集団体操の機運は澎湃として各国に漲っている」と民族意識、国家信念、集団体操の機運などの関連からソコールに着目している。昭和12年(1937)植田は、ソコール本部、ソコール祭の視察の報告をし、ソコールの父ティルシュ博士の思想を取り上げ、「ソコール運動は国民訓練と体育を兼ね、併せて愛国的精神の修養を目的とするもので単なる保健運動ではない」とする点に注目している<sup>68)</sup>。同年森脇は、論説「民衆体操を提唱す」<sup>69)</sup>の中で、ソコールは「チェコ独立の原動力であり、世界的な産業王国にした」と民族独立、産業発展の原動力と指摘した。昭和12年(1937)東京朝日新聞「標題各国の体位向上運動チェコスロバキア“ソコールに”培う 国民自身の体育 七十五ヶ年の伝統」<sup>70)</sup>では、「チェコは政治的には小国だが、スポーツ、少なくとも国民のためのスポーツという点では、大国日本に先んじている。・・・要するに、チェコのスポーツは至って大衆的、民衆的で、国家としてはソコールがスタジアムを作るとか、ソコールの家を建てるとかいった協会に補助金をだす程度のことはあるが、大体不干渉方針であり従って特別の国家的施設、指導方針がある訳で無く又神宮競技の如き国家をバックとして催される訳でもない。政府が別に策を講じなくてもスポーツは広まり、体育は向上する程度に国民の知識も開け、生活も安定している。この点で何と言ってもチェコは日本に先んじて

いる」として、日本と比較し、ソコールの国民体育、スポーツの振興を評価している。

昭和13年(1938)吉田(外務省通商部外務事務官)は、国際文化事業講座『ビルゼンビルとソコール運動の国—チェコスロバキアの話—』の中でチェコの地理・歴史・経済・文化・体育について紹介しながら、ソコール運動について、団体体操の立派さは学ぶべきところが多いと述べている<sup>71)</sup>。IV期ではソコール祭の記述は少ないが、昭和14年(1939)東京朝日新聞では、標題「三万人の豪華律動美 第十回ソコール体操祭」<sup>72)</sup>として、「体操祭がチェコスロバキア共和国の建国二十年を祝い各国の来賓を集めて盛大に挙行された」と報告している(写真3)。昭和14年(1939)には本間(体育研究所)による2つの論説では、ソコールを「スラブ民族の為に考えられた政治的スポーツ団体」<sup>73)</sup>と云い、また、国際体操連盟総会出席の為に欧州視察の報告の中で、「二大世界体育行事」としてソコールを取り上げ、「国防目的とした体操家の示威運動」とした。また、「世界に冠たるソコール大会は、流石に余を驚かすものが多数あり將に興隆の波に乗らんとする吾が国に於ける同種の催しに比較して大いに啓発された」とソコール大会と日本の祭典を比較しながらソコール大会の祭典としての質の高さに注目した<sup>74)</sup>。同年中島は、ソコールを「チェコで組織された愛国団」とし、集団体操の壮大な美の表現と旺盛な団結力に着目しながら、「我国のマスゲームなるものの起こりはこれの刺激と影響によると云うも誤りでないと思う」とソ



写真3 東京朝日新聞. 三万人の豪華律動美 第十回ソコール体操祭. 『朝日新聞』, 1938年8月6日

コールの我が国のマスゲームの創始への影響を指摘している<sup>75)</sup>。昭和15年(1940)児玉(初代厚生省体育局長)は、論説「体育の民衆化と国家的統制」<sup>76)</sup>の中で、ソコールは「民族的政治的色彩の機関」であり、「国民体育の標本」と述べた。また、「国民精神の涵養、国家隆盛の源泉としての体育」であり、「体育の民衆化、普遍化、国民化」を推進する国策としての体育に注目している。児玉は、昭和13年(1938)東京朝日新聞標題「第四回体操大会関東大会の賛辞」<sup>77)</sup>の中で、厚生省体力局長談として、「我々は体育の普遍化と国民化とを常に考慮しております。欧州諸国では、既にこの方面で非常な躍進を示して居ります。ドイツ、イタリーの体操運動は既に良く知られて居るが、チェコのソコール運動、デンマークの体操運動も有名だ、それによって健全な精神と肉体とをつくらせて国民が如何にも生活を楽しんでいる、これは体操のおかげだと思う。本大会の盛んな光景を見てその力強いこと、国民の意欲の頼もしさを感じました」とソコールの体操運動による国民の精神的肉体的成果と生活の充実に注目しており、当時の厚生省体力政策の動向を考えた評価ともみることができる。以上のようにⅣ期では、ソコールは、大石、社会教育研究所、大島などに代表される国民訓練の体育、民衆運動と青少年運動の側面が強調される。この期においては、昭和12年(1937)5月29日青年学校教授及び訓練要目が制定され、青年訓練が強化される。また、同年11月11日外務省情報課小川昇は「チェコスロバキアの青年運動とソコールに就いて」と題してソコールに関する放送を行っている<sup>21)</sup>。当時、青年育成運動との関わりが注目されている。また、大石、吉田、植田、本間、中島らにみられるソコール祭、集団体操の厳格さ、壮大な美の表現、旺盛な団結力などがⅡ期・Ⅲ期同様に注目されている。本間は、ソコールを世界二大体育行事と位置づけ、「世界に冠たるソコール大会に啓発された」とソコール大会の質の高さを評価、また、中島は、日本におけるマスゲーム創始への影響を指摘している。この時期のソコール祭や集団体操への

注目は、国民精神作興や団体訓練としての合同体操、体操大会、団体行進などの推進を念頭に入れたものと考えられる<sup>21)</sup>。大島は、日本では体育・スポーツ・体操等の認識に混乱状態であるため「体育を通じての国民性発揮或いは国民的な独自の運動法など十分検討される必要がある」<sup>66)</sup>と国民体育と独自の運動方法を指摘し、児玉は、ソコールを代表的な国民体育のモデルとし、「体育の民衆化、普遍化、国民化」<sup>77)</sup>の政策への努力をあげ、国策としての体育や、体育の民衆化に注目している。

Ⅳ期では、文献数もⅢ期よりも減少し、ソコールの捉え方(視点)もⅡ期・Ⅲ期より限定される傾向などから、ソコールに対す関心が薄れてきたことが明らかである。これらⅣ期の傾向から、この時期を「ソコールへの関心衰退期」と位置づけることができる。

### 3) 大正末期昭和初期における体育スポーツ関係者のソコールの捉え方(視点)と日本への影響

ここでは、体育スポーツ関係者のソコールの捉え方(視点)と日本への影響について考察する。Ⅰ期からⅣ期までのソコールの捉え方としては、国民運動(ムーブメント)、ソコール大会、組織と運営、ソコールのねらいと精神、愛国精神、国民体育、チェコの体育、青少年運動との関連などがあった。以下主要な視点について順を追って検討する。

第一には、ソコールの国民運動(ムーブメント)としての捉え方、チェコの独立やと統一、国民運動、民族運動などの関連で扱われた。チェコの独立や民族統一との関連では、大正12年(1923)下田「民族統一、団結と示威運動」<sup>14)</sup>、昭和6年(1931)国際パンフレット通信「独立と民族の解放、軍事主義の示威」<sup>40)</sup>、昭和7年(1932)加藤「ソコール体操は、武装し得ざる国民の超武装的訓練であり民族的団結の表れ」<sup>56)</sup>などがあげられる。また、同年岩野は、「国民統一運動」として紹介し、ソコールの主旨は、「体育に名をかりて国民精神を覚醒し自由、平等、同胞精神に依りチェコ・スロバ

キ全体を統一するにあつた<sup>53)</sup>と指摘した。さらに、昭和12年(1937)森脇は「チェコ独立の原動力」として、統一、独立と関係させて述べている<sup>69)</sup>。これらは、第一次世界大戦の戦勝国であるチェコの独立に果たしたソコール運動の成果に注目したものである。民族の統一と独立運動以外にも、国民運動と愛国運動などの用語でソコールを捉えた記述が多くみられた。昭和2年(1927)岡部「愛国的精神運動」<sup>23)</sup>、また、同年大谷は、「近年一種の国民訓練の必要性が高まり、国民運動への注目からソコールが問題にされる」<sup>24)</sup>と指摘する。昭和4年(1929)小笠原は、ソコールは「国民体育の振興をねらいとする愛国運動として設立、独立に寄与した」<sup>29)</sup>と述べた。昭和5年(1930)佐々木は、チェコの「国家的ムーブメント」とし、「国民の意気を揚げ、士気を盛んにするもので、隣国へのデモンストレーション」<sup>2)</sup>と当時珍しくムーブメントと紹介した。同年合田も「国民的愛国運動」<sup>38)</sup>と取り上げている。昭和9年(1934)松岡は、「チェコのソコール国民体操が民族運動として偉大な成功を収めた」<sup>63)</sup>としている。以上のようにI期からIV期まで通して、ソコールの国民運動としての捉え方は、民族統一、国民運動、愛国運動などの用語を活用した捉え方が多数みられた。これは、第一次世界大戦後の欧州などの国外の動向や国内の国民精神作興などの国家主義的政策実施の動きと強く関係したものである。

第二に、ソコール祭とソコールの集団体操に注目した捉え方が見られた。ソコール祭は、チェコの独立や民族解放などや民族のソコール精神の象徴であったが、ソコール祭については、大正13年(1924)井上は、「チェコの国民祭」<sup>15)</sup>として、また、昭和7年(1932)森は、第8回ソコール祭を「真に調和美」<sup>51)</sup>と大会について報告し、昭和8年(1933)吉田は、9回大会は「第11回オリンピック大会と共に世界二大運動大会として国際的人気を集めた」<sup>58)</sup>と評価した。同年村山は、第9回ソコール祭について「素敵な壮観の組織の広大な精神並びに完全さの観念を觀る」<sup>60)</sup>と大会の壮大さと完成度

を指摘していた。これらの記述は、世界的に知られたソコール祭に注目した例である。また、ソコール祭と同時にソコール体操(集団体操)が注目されている。昭和5年(1930)真行寺は、「ソコール祭に於ける集団体操こそは真に偉観又壯観である」<sup>34)</sup>とし、昭和6年(1931)菅原は、英国スティード氏によるプラハ体育祭の記事に同感し、「ソコールの愛国運動の如く、底に脈々たる熱烈な理想の流れる集団運動がなければ意義がない」<sup>78)</sup>として、ソコールの集団体操に注目している。昭和11年(1936)大石は、「ソコール祭の集団体操は、厳格である」<sup>64)</sup>としていた。昭和13年(1938)吉田は、ソコール運動の「団体体操の立派さは学ぶべきところが多い」<sup>71)</sup>と述べている。当時の体育スポーツ関係者は、ソコール体操の壮観さ、厳格性、集団美や調和美などを評価していた。集団体操と関連して、当時日本で普及した集団体操(マスメーム)への示唆や影響を述べた記述がみられる。昭和7年(1932)岩野は、ソコール祭の集団体操について、「女子のマスメームは非常に面白く専門家の参考となる様にも思われた。それは実によく音楽のリズムに体操を合したこと、連続結合体操が実に無理なく出来たことだった」<sup>53)</sup>と日本の専門家への参考例となる点を指摘している。昭和14年(1939)本間は、ソコール大会と日本の祭典を比較し祭典としての質の高さに注目した<sup>73)74)</sup>。同年中島は、ソコールの「集団体操の壮大な美の表現と旺盛な団結力」に注目しながら、日本のマスメーム創始への影響を指摘していた<sup>75)</sup>。

第三に、ソコールの組織と運営について注目されている。まず、ソコールの組織、活動・事業とその著名度への注目があげられる。昭和5年(1930)文部省社会教育局は、ソコールは、「幾多の体育協会の組織・管理方法、最大の会員を持ち、社会のあらゆる階級の人を集めている」<sup>30)</sup>と、最大の会員数と層の広さに注目している。昭和6年(1931)白尾は、ソコールを「チェコ共和国宣言の国民的な生命の源泉」としてソコール運動をあげ、「ソコールのような組織的、団体的な民族スポーツが世界の何処に

あるであろうか<sup>42)</sup>と世界的な組織力にも言及している。同年菅原は「高い理想と目的を掲げ偉大な事業にあたるソコール運動は研究の価値がある<sup>78)</sup>」としている。これらは、ソコールの組織や活動の高度化、充実度を評価した例である。また、ソコールの思想や理想の記述として、大正15年(1926)文部省社会教育局の合田は、「ソコール協会は、体操、律動的運動、各種競技、音楽、日常栄養について訓練された男女成人青年児童を対象としたクラブで、高尚な人格、社会的理想を意図する」とソコールの理想を指摘した<sup>22)</sup>。また、昭和5年(1939)合田は、指導者ティルシュの理想として、「心身に多方面の発達と、調和した発達とを遂げた完全な個人が、彼の求め、而して発見したもの」であり、「美しくして善良なる個人」がティルシュの新青年教育の理想であったと古代ギリシャの人間像と同じものを見ている<sup>38)</sup>。昭和8年(1933)村山は、最高指導者ティルシュの思想と訓練課程に注目し、「彼の体操は、高尚な体育理想の要素を含み、また完全、規律正しい、整然とした体操は高遠な国家的目標へ通ずる最善の路」としていた<sup>37)</sup>。昭和12年(1937)植田は、ティルシュの理念である『国民のちからと健康を増進することによって国家観念を養え』に注目した<sup>68)</sup>。これらは、ソコールの思想や指導者の理念に着目してものである。その他ソコールの思想の中でも、民主ラティックな精神に注目した捉え方が見られた。昭和2年(1927)水野は、「ソコル団は、独立国の国民たるに適せることに成功した。斯くして民主ラティックの国民気質を培養し、各階級の共同一致の精神を鼓舞した<sup>26)</sup>」とし、民主ラティックな国民気質の養成に着目している。昭和3年(1928)サラトナイ(チェコ大使)は、「スポーツが体育専制をめざすに反し、ソコール体操は体育民主ラシーの表示である」と体育民主ラシー的特性を指摘していた<sup>27)</sup>。昭和5年(1930)文部省社会教育局は、ソコールは「チェコスロバキヤの体育の特色は、其の普及せることと、民主ラティックな精神と、自助の精神である<sup>30)</sup>」と水野、サラト

ナイと同様民主ラティックな精神を見出している。これらソコールの組織や活動、事業と同様に關係して、日本の体育スポーツに導入しようとする意見が提案されている。大阪朝日新聞社東口真平は、国民体育との關係から日本での類似の組織の設立を望んでいた<sup>32)</sup>。昭和7年(1932)森秀は、第8回ソコール大会を評価しながら、全日本体操連盟の使命として、日本でのソコールと類似の組織の実現を願望していた<sup>51)</sup>。これらは、昭和3年(1928)のラジオ体操開始に伴うラジオ体操組織の普及、昭和6年(1931)のデンマーク体操団の来日などに伴う社会体育(体操)の普及などとも関連し、日本への類似の組織普及への願望を示したものである。

第四に、上記以外の視点としては、国民体育の奨励と振興への注目があげられる。昭和2年(1927)大谷は、「チェコの体育は非常に発展し、今では国民教育の一要素となり、国民的習性となりつつある<sup>24)</sup>」としている。また、同年嘉納は、「チェコにはソコールという国民体育がある<sup>26)</sup>」と紹介している。昭和3年(1928)にサラトナイは、ソコールを「チェコスロバキア全国民の健康増進、剛健なる国民精神振興に、国民訓練と体育とを兼ね・・・」、平時にあっては、組織的に国民の体育を奨励し、国家有事の日に備ふる<sup>27)</sup>と国民体育の視点から述べている。昭和4年(1929)東口は、前述した通り国民体育の向上のためソコールの類似の組織の実現を望んでいた<sup>32)</sup>。同年大野は、ラジオ体操講演録の中で、ソコール団の盛んな活動を述べ、欧米人と比較した日本人の体格水準の劣ることを指摘し、国民の体格向上などを旨とする体育の奨励をしている<sup>33)</sup>。昭和5年(1930)文部省社会教育局は、ソコールは「愛国的体育団体であり、主に体育振興である。・・・国民訓練と体育とを兼ね、併せて愛国的精神の修養を目的とし、単なる保健運動ではない。」<sup>30)</sup>と体育振興と愛国精神の視点から述べていた。昭和7年(1932)読売新聞は、第9回ソコール祭紹介の中でソコールの意義を「体操の改良に加え団体的訓練によってチェコ国民の体育と徳育に

貢献」したとしており、チェコの徳育を含む国民体育への視点を明らかにしている<sup>21)</sup>。昭和15年(1940)児玉は、ソコールは「国民体育の標本」と述べ、また「国民精神の涵養、国家隆盛の源泉としての体育」であり、「体育の民衆化、普遍化、国民化」を推進する国策としての体育に注目している<sup>76)</sup>。これらは、チェコの体育の普及や国民体育の普及の視点であり、日本における国民体育への実現を期待するためである。

第五に、いま一つのソコールの捉え方として、ソコールと青少年運動との関わりで捉えられるが、昭和2年(1927)水野は、チェコの体育競技は有名であり、特に青年団は世界に知られた国民運動団体とし、「全国の青年よ。世界の大勢に目覚めて国家の為に奮起せよ」<sup>27)</sup>と喚起していた。昭和9(1934)宮下は、論説「体育と国家と青年教育」の中で、「青年教育は、体育を高め、道徳的教養を与え、社会観念を喚起し、ひいては、神を畏敬し、祖国及び郷土愛を・・・青年に持たせる事である」<sup>62)</sup>とソコールと青年教育との関係を述べている。昭和11年(1936)社会教育研究所は、「独逸、伊太利亜、チェコで生まれ出た青少年運動は、戦後の欧州視察に赴ける我国の有識者をいたく感激せしめた」<sup>65)</sup>と述べている。同年大島は、ソコール運動が、「純然たる民衆の教育運動であり、修養自治機関であることが、我国の青少年運動に酷似しており・・・」<sup>66)</sup>と青少年運動に着目している。これらは、昭和11年(1936)以降の日本における青年運動との関係からソコールの青年運動に注目した例と考えられる。

大正末期昭和初期において、ソコールは、国民運動の一環として取り上げられた。主要行事としてのソコール祭は、国家の象徴・国民精神を高揚する場として注目され、また集団体操も、国民訓練の手段、国民精神や愛国心醸成の手段として考えられた。国民体育への注目も青年団を中心に、列強に打ち勝つ国民訓練、軍事的な体位、体体育成の政策の一環として考えられた。まさに、ソコールは、世界的に注目された民族統一、愛国心育成を意図した「国家的な

ムーブメント」であり、また、「国家主義・全体主義的な装置」としてのモデルでもあった。

しかし、体育スポーツ関係者などは、豊かなチェコスロバキアと組織的で、事業活動の充実したソコール運動の輝きに注目した理由もあったのである。第一に、チェコは第一次大戦後の戦勝国であり、独立を果たした愛国心の強い民族への注目があり、また独立を実現したソコール運動の世界的な活動への注目である。第二に、ソコール祭は、独立を果たしたチェコ民族の統一、国民精神の象徴の場であり、世界的な大会規模、ティルシュなどの指導者や国民を讃える輝かしい国民祭としての注目を集めたことである。また、大会のソコール体操は、集団体操の集団美、調和美、統一性などへの注目は単なる国家主義的装置の意味だけでなく、集団体操の普及や見る体操イベントの出現など日本の体操界にも影響を与えたものであった。集団体操の充実度、体操の指導過程、内容の充実度などへの注目もみられた。第三に、ソコールの組織、運営については、日本の社会体育の組織がまだ未発達な状態であったため、ソコールの組織運営は、ソコール組織と会員数の規模や広さ、共同出費による運営、施設の充実(中央と地域のソコールの家)、教育・文化・体育スポーツなどの事業の充実度、思想の高尚さ(ギリシャの体育思想、デモクラティックな精神など)が注目された。第四に、国民体育との関連では、チェコは国民体育スポーツ普及へのモデル国として注目されたことである。第五として、青年運動との関連については、国民体育と体育振興の中核としての青年層が注目されたことがあげられる。

以上のように、大正末期昭和初期においては、総力戦前のほぼ戦間期ではあったが、特に国内で戦争の影響が少ない期間(特に大正12年1923年から昭和10年1935年)内務省、文部省(体育局、社会教育局など)による体育スポーツ政策に併せて、ソコール運動が注目された。また、昭和3年(1928)ソコールを参考にしたラジオ体操の普及と体操組織の実現、昭和5年(1930)創設された全日本体操連盟による

全国的な体操普及、さらに、昭和6年(1931)デンマーク体操普及による社会体操の普及なども関連し、短い時期ではあるが日本の体育スポーツ関係者にとってソコールは一つの「国民体育、社会体育(体操)普及のモデル」としての役割を果たしたものと見えよう。

#### 4. 結 論

本研究の目的は、日本の大正末期昭和初期におけるチェコのソコール運動に関する著書論文を検討し、当時の体育スポーツ関係者のソコールの捉え方及び日本への影響を考察することであった。得られた結果は以下に示すとおりである。

##### 1) 大正末期昭和初期の日本における「ソコール」の紹介と受容

「ソコール」は、日本において大正11年(1922)から昭和15年(1940)まで(特に1927年から1935年)の期間に紹介された。

##### 2) 大正末期昭和初期における各時期のソコールの捉え方

本研究では、資料の出現年代の関係からⅠ期からⅣ期の四期に分けてソコールについて考察を試みた。Ⅰ期「ソコールの紹介期」では、関係文献も少なく、国民精神、愛国運動、ソコール祭と集団体操、チェコの体育奨励、国民体育などが指摘されていた。Ⅱ期「ソコールについての知識普及期」では、文献数が増え、ソコールの捉え方も、国民精神(愛国心)、国民体育振興、体育デモクラシー、組織と活動、理想や思想、体操事業と集団体操など視点も広く扱われた。昭和6年(1930)は、文献数が増え、国民運動ムーブメント、愛国精神、集団体操、世界的な組織などの多くの捉え方から紹介された。Ⅲ期「ソコール運動の理解浸透期」では、満州事変などの戦争期ではあるが、文献数も最も多く、体育スポーツ関係者、政治家、メディア関係者など幅広い人材に取り上げられた。Ⅳ期「ソコールの関心衰退期」では、総力戦前期

であり、精神動員から物的な動員に向かい、国外ではドイツ、ポーランドによる領土の併合などがあり、内では、国民の体育スポーツにも国家主義への傾斜から波及し、ソコールへの関心が薄れる時期であった。

##### 3) 大正末期昭和初期における体育スポーツ関係者のソコールの捉え方(視点)と日本への影響

体育スポーツ関係者によるソコールの捉え方としては、①国民運動(ムーブメント)、②ソコール祭の世界的著名度、集団体操の規模と完成度、③ソコール組織と運営、ソコールの理念(組織の思想、指導者の理想など)、④チェコの体育奨励と国民体育、⑤青少年運動との関連など多様な視点でみられた。当時のソコールは、世界的に注目された民族統一、愛国心育成を意図した「国民運動(ムーブメント)」であり、「国家主義の装置」としてのモデルでもあった。他方、総力戦前の戦間期ではあったが、特に、日本の体育スポーツ関係者にとって、ソコールは「国民体育、社会体育(体操)普及のモデル」としての役割を果たしたものと考えられる。

今後は、大正末期昭和初期から時期を広げ、ソコール運動について文献を収集し、その考察を行うと共に、今回触れていない国外の諸文献なども参考とし、大正末期昭和戦前期のソコールが日本の体育の社会化や、社会体育・集団体操の普及の展開に与えた影響などを検討していきたい。

#### 参考文献

- 1) 成田十次郎, 近代ドイツ・スポーツ史Ⅰ 学校・社会体育の成立過程: 430-434, 不昧堂, 1991
- 2) 佐々木等, 欧州体育の新傾向: 234-238, 明治図書, 1930
- 3) 玉川教育研究所編, 体操アルバム『ソコール国民運動(1)・(2)』, 玉川文庫19・20, 1932,

- 4) 浜田靖一. マスゲームの歴史. マスゲーム：236-250, 大修館, 1935
- 5) 紅林武男. SPARTAKIADA スパルキアード, 青雲社, 1960
- 6) 功刀俊雄. 初期ソコル運動の方針をめぐって. 東欧史研究, 7:87-106, 1984
- 7) 清和洋子. ポーランド「ソコール」. 日本体育学会大会号 32:160, 1981
- 8) 福田宏. ソコルと国民形成—チェコスロバキアにおける体操運動—. 近代ヨーロッパの探求 8 スポーツ. 望田幸男・村岡健次監修:67-96, ミネルバ書房 9, 2002
- 9) 福田宏. 我が祖国への想像力—ドイツ系多数地域におけるチェコソコル運動. スラブ研究, 49:29-50, 2002 平成 14 年
- 10) 福田宏. チェコにおける体操運動とネーション—ナショナリズムシンボルをめぐる闘争. 東欧史研究, 24:7-47, 2002 平成 14 年
- 11) 大平洋一 (2018). 帝政ロシアと在外ロシアの<ソコル>—体操運動とナショナリズム—. 天理大学学報, 68 (2):93-104, 2018
- 12) Claire E.Nolte (1993). The Sokol in the Czech Land to 1914: Training for the Nation. Palgrave MacMillan, New York, 2002
- 13) 鶴見祐輔. 欧州大戦後の思想的中心とソコール運動, 講道館文化会. 柔道 1 (8):2-7, 1922
- 14) 下田次郎. 運動競技と国民性:177-179, 右文館, 1923
- 15) 井上貫一. 欧米学校印象記, :276 - 283 東京同文館, 1923
- 16) 井手敏雄. ソコールフェストを観て. 公衆衛生, 41 (3):14-15. 1924
- 17) 大谷武一. 体育の諸問題:173-183, 目黒書店, 1924
- 18) 氏原佐蔵. 国民保健の増進と運動競技奨励の必要. 内務省篇『運動競技全書』. 社会体育スポーツ基本史料集成第 7 巻:16-18, 1992
- 19) 大井浩. 各国に於ける保健増進施設としての運動競技奨励の趨勢. 運動競技全書 社会体育スポーツ基本史料集成 7. 内務省編:40-54, 1992
- 20) 明治神宮体育会編. 第 2 回明治神宮大会報告書. 内務省, 1926
- 21) 木下秀明. 体操の近代日本史. 不味堂, 1952
- 22) 合田亀太郎. チェコスロバキヤにおけるソコル体育祭. 文部省社会教育会篇:55-61, 社会教育 3 (11), 1926
- 23) 岡部平太. ソコール運動の研究. 講道館文化会編. 作興 6 (4):16-21, 1927
- 24) 大谷武一. ソコール運動. 体育と競技 14 (7):4-14, 1927
- 25) 嘉納治五郎. 将来の国民体育について. 嘉納治五郎著作集:366-370, 1927
- 26) 水野鍊太郎. 欧米政界の新潮流:228. 政治教育協会, 1927
- 27) サラトナイ. 愛国運動ソコール. 民衆文庫第十九篇, 社会教育協会, 1928
- 28) 今村嘉雄. 欧州体育大観. 体育と競技 7 (4):48-53, 1928
- 29) 小笠原長生, 猪狩又蔵. ソコール愛国運動. 愛国心:143-148, 1929
- 30) 文部省編. チェコスロワキヤに於けるソコール運動. 欧米青少年運動の精神と実際:207-276, 時事新報社, 1930
- 31) 岸野雄三他編. 新版近代体育スポーツ年表, 大修館, 1986
- 32) 東口真平. 体育の要諦は実行にあり. 国民健康保険体操講演集 (一):67-70, 簡易保険局, 1929
- 33) 大野精七. 体育国策論. 国民健康保険体操講演集 (一):15-25, 簡易保険局, 1929
- 34) 真行寺朗生. 集団 (合同) 体操の方法と実際. 日本体育学編:1-4. 1930
- 35) 大谷武一. 体操の使命. 体操 1:3-4, 全日本体操連盟, 1930
- 36) 大麻唯男. 体育の力. 体育と競技 8 (1):2-4, 大日本体育学会 1930
- 37) 村山正明. 欧州に於ける体育と競技概観.



- 体育と競技 10 (2) : 70-77, 1933
- 38) 合田亀太郎. ソコールの父ティルシュ. アカツキ 5 (12) : 13-18, 1930
- 39) 合田亀太郎. ソコル運動と其の体育祭—チェコスロバキアに於ける青年運動—. アカツキ 5 (2) : 88-96, 1930
- 40) 国際パンフレット通信部. 愛国大運動ソコール 455, タイムズ出版, 1931
- 41) 大谷武一. 体育運動の効果と弊害の省察. 体育と競技 10 (2) : 2-9, 大日本体育学会, 1931
- 42) 白尾千城. チェッコの礎ソコール運動. 婦人之友社 25 (4) : 42-61, 1931
- 43) 東京朝日新聞. 連合青年団をチェコに招待名物ソコール祭へ. 『朝日新聞』, 1931年7月30日
- 44) 大阪朝日新聞. 体育運動歌を高唱して大行進 明治節の体操祭 体操週間はあすから. 『朝日新聞』, 1931年11月1日
- 45) 東京朝日新聞. 五月空の下・日本体操大会迫る. 『朝日新聞』, 1931年6月4日夕
- 本誌において 岩原拓(文部省体育課長)は「民族総合への力 合同体操の真意義」の中で「ボヘミア民族がソコール体操によりその民族意識を鍛え上げたごときは有名な話である。」と注目し、文部大臣平生鉄三郎は「チェコスロバキアに興ったソコール祭など国家的信念に生きる国民は、自身の手によって強力な国家を建設しつつあり、集団体操の機運は澎湃として各国に漲っている。・・・」とソコールを取り上げている。
- 46) 読売新聞. ソコール第9回を六月プラ-グで. 『読売新聞』, 1932年1月27日
- 47) 大阪朝日新聞. ソコール運動の始祖 生誕百年記念大会 今夏プラ-グで華々しく挙行 二十二カ国会場に招待. 『朝日新聞』, 1932年3月12日
- 48) 大阪朝日新聞. ソコール祭(上) 息づまるような操練美 7月2日から四日間. 1932 『朝日新聞』, 1932年3月12日、同. ソコール祭(下) 朗らかな陽の下 光と色の乱, 舞 大会を貫く精神は宗教的. 国民的信仰. 『朝日新聞』, 1932年3月13日
- 49) 大阪朝日新聞. 六千人の先生が練り上げる体力 この盛況をフィルムに撮りチェコのソコール体操会へ 大阪全市小学校第一回体操大会. 『朝日新聞』, 1932年5月30日
- 50) 玉川教育研究所編. 体操アルバム「ソコール国民運動」(1) & (2) : 1-4, 玉川大学出版, 1932
- 51) 森秀. 民族発展とソコール運動. 体操 2 (5) : 2-4, 全日本体操連盟, 1932
- 52) 高木翠岱. 偉大なる哉ソコール祭. 体操 2 (5) : 10-11, 全日本体操連盟, 1932
- 53) 岩野次郎. 第九回ソコール体育祭を観るの記 プラ-グにて. 体育と競技 11 (9) : 58-62, 1932
- 54) 川端昭夫、木村吉次. 大楠公六百年祭記念体操大会の創始と日本体操大会の創設. 体育史研究 30 : 19-39, 2013
- 55) 村田忠一. 国家意識と体育. 体育と競技 11 (6) : 29-35, 大日本体育学会, 1932
- 56) 加藤普佐次郎. 愛国運動ソコールの精神三越 22 (1) 35-37, 1932
- 57) 二荒芳徳. 思想非常時と現代教育の革新 : 260-269, 大日本力教会東学社, 1933
- 58) 吉田清. ソコール祭とは何か?. 体操 3 (1) : 10, 全日本体操連盟, 1933
- 59) 甲佐知定. チェコ・スロバキアのソコールフェスティバルに就て (1) アサヒスポーツ 10 (2) : 17-20, 1933
- 60) 村山正明. チェコスロバキアに於ける体育. 体育と競技 12 (1) : 45-47, 1933, 同 チェコスロバキアに於ける体育. 体育と競技 12 (2) 43-47, 1933
- 61) 広井家太. 欧州の体操界. 体育と競技 13 (9) : 2-12, 大日本体育学会, 1933
- 62) 宮下二郎. 体育と国家と青年教育. 体育と競技 13 (9) : 24-34, 大日本体育学会, 1933
- 63) 松岡清一. ラジオ体操が創始されるまで. 体操 4 (10) : 7-8, 全日本体操連盟 1934
- 64) 大石峯雄. 民族体育の日本的建設 : 92-

- 104, 成美堂, 1936
- 65) 社会教育研究所. 我国社会教育の過去及将来. 社会教育 7 (5) : 30-35, 1936
- 66) 大島長三郎. 青少年団運動として見たるソコール. 帝国少年団協会叢書, 7 : 29-49, 1936
- 67) 東京朝日新聞. 五月空の下・日本体操大会迫る. 『朝日新聞』, 1936年6月4日
- 68) 植田三四郎. 欧州体育の諸問題都会人型虚弱児の体育. 実文館 : 87-94, 1937  
植田は、ソコールに関する記載の中で、ソコールの父ティルシュ博士の思想『国民のちからと健康を増進することによって国家観念を養え』を取り上げている。
- 69) 森脇正夫. 民衆体操を提唱す. 社会教育, 8 (8) : 41-43, 1937
- 70) 東京朝日新聞. 標題各国の体位向上運動 チェコスロバキア “ソコールに” 培う 国民自身の体育 七十五ヶ年の伝統. 『朝日新聞』 1937年3月20日
- 71) 吉田健吉. ピルゼンビールとソコール運動の国—チェコスロバキアの話—. 国際文化事業パンフレット, 5, 1938
- 72) 東京朝日新聞. 三万人の豪華律動美 第十回ソコール体操祭. 『朝日新聞』, 1938年8月6日
- 73) 本間茂雄. チェコスロバキアとソコールの思出. 体育と競技 18 (6) : 40-48, 1939
- 74) 本間茂雄. 国民体力向上策としてのドイツ体育大会を見る. 体育研究 18 (6) : 316-342, 体育研究所, 1939
- 75) 中島海. ソコールを省みて. 体育と競技, 18 (5) : 40-42, 1939
- 76) 児玉政介. 時局と国民体力. 体育の民衆化と国家的統制 : 35-36, 体育の世界的動向と我国体育の将来, 目黒書店 : 169-175, 1940
- 77) 東京朝日新聞. 第四回体操大会関東大会の賛辞. 『朝日新聞』, 1938年5月2日
- 78) 菅原亀五郎. 世界列国の青少年運動. チェコスロバキアに於けるソコール運動の世界的反響 : 46-78, 宝文館, 1931